

2011.03.04.

21 世紀文明セミナー

講師：坂上義太郎 (BB プラザミュージアム副館長)

河崎晃一 (兵庫県立美術館 企画・学芸部門マネージャー)

- 1、 美術品のコレクションとは？ (河崎)
 - (1) コレクター 作家 画商、古美術商、道具屋
 - (2) 阪神間のコレクター

- 2、 コレクション具体例
 - (1) 柿衛文庫 (伊丹)
岡田利兵衛
 - (2) 伊丹市立美術館
安宅コレクション
 - (3) BB プラザミュージアム
島田文六
 - (4) コレクションの展覧会
T 氏コレクション (伊賀上野)

- 3、 コレクションにおける美術館と個人
 - (1) 美術館のコレクション
 - (2) 個人コレクションの楽しみ

- 4、 その他

阪神間の 蒐集家たち

Kawasaki Koichi

河崎晃一

「名流」の趣味人たち

大阪財界を率いる「名流」と呼ばれた人たちの間で余暇、趣味を満足させる蒐集が盛んになりはじめたのは、明治時代末から大正時代はじめの頃であろうと推測される。『大正時代と文化』（昭和十七年、伊達俊光著）に収録されたコレクター訪問記「名流趣味」は、大正五年（一九一六）から六年にかけて大阪毎日新聞に連載されたものであり、すでに美術品蒐集家として十数人が紹介されている。商人・経営者として財を成した彼らは、阪神間に住まいを求め、そこに暮らしの基盤をおいて自らの生活の主張を蒐集に向けたのであった。大正時代末の大阪の実業家の間では、なんらかの形で芸術と関わりをもったり、支援をおこなうことが流行ったといっても過言ではない。商人として成功した彼らが、その証として文化に身を投じたことは、それまでの時代の支配階級であった武家や華族と同等の価値観を求め、自らの精神性を問う自己高揚の手段であった。住まいには茶室が設けられ、交流の場として盛んにおこなわれた茶会は、その最も顕著な表れである。客人を招いての茶の湯の席に用いる道具や書画は、主人の好みや主張の反映であり、生き方そのものを問われる自己表現の手段でもあった。

『大正時代と文化』の訪問記では、「我邦経済界の中心たる阪神地方を始めとして、関西一帯にかけて各富豪の蒐藏品は関東を壓するものがあらうと思はれる。（中略）かの御影の白鶴美術館の所藏品は其骨董価値の高い珍宝を以て鳴り、好事家の垂涎せしめてゐるし、住友家の蒐藏品中殊に古銅器の蒐集館（京都）は世界無比のものでわが国の誇りであるが、此等はまあ別格として、その外に上野精一、村山長舉、武藤金太の諸氏の如き先代の蒐集を其まゝ完全に保存せられてゐる点に於て、又人形其他の蒐集を以て聞えたる山口吉郎兵衛氏、仏像の方面で野田吉兵衛氏、洋画では右近權左衛門、岩田希芳の両氏の如き、最近小林一三氏が自家所蔵品の美術館を建てると云ふ噂があり、これに骨董業界の諸氏を挙ぐれば限りがなく、又新富豪の台頭も見通し難いものであらう……」とその个性的蒐集を語っている。

个性的蒐集

明治十二年、大阪で朝日新聞が創刊された。創設者・村山龍平（一八五〇—一九三三）は、香雪と号し日本の新聞界に多大な業績を残したが、コレクターとしては、刀剣にはじまり仏画や茶道具、円山応挙、尾形光琳らの絵画など各分野を網羅している。岡倉天心らの主宰した美術雑誌『国華』の経営を引き受

け、また朝日新聞社の学芸部の充実など美術界への影響も数々と見受けられる。村山龍平は、阪神間のなかでも最も先駆的で、スケールの大きいコレクターであった。

阪急電鉄の発展を背負った小林一三（一八七三—一九五七）の美術品蒐集は、二十代半ばからはじまっていたという。小林は逸翁と号し、小林ならではの影響力をもつコレクターとなった。昭和四年、大阪梅田のターミナルに開業した阪急百貨店の全館落成を期して、昭和七年に茶席や陳列場を設けた。そこには骨董街として数軒の古美術商も店を出した。また美術雑誌『阪急美術』（後の『日本美術工藝』）を毎月発行するなど、幅広く一般に茶道具屋や古美術蒐集家の層を広げることに貢献した。文学青年であった頃からの情熱は、実業家としてその手腕を発揮しはじめた明治末にはすでに蕪村、呉春などの蒐集に向けられていた。とくに茶人としての小林が茶道具蒐集にかけた姿勢、茶道への提唱は、仕事の上での発想同様に時代の先端を歩んでいたといえる。

多くの阪神間のコレクターのなかでも最も早く私財を公開したのは、白鶴醸造元・嘉納治兵衛（一八六二—一九五二）であり、昭和六年、住吉の山手に白鶴美術館を創設した（竣工は昭和九年）。中国古代銅器、中国陶磁器を主としたコレクションは、今日の国宝、重要文化財を含むもので、その多くは昭和初期に中国において発掘されたものである。

滴翠と号した山口吉郎兵衛（一八八三—一九五二）は、銀行家の四代目として生まれ、幼なくして当主となり家業を継いだ。滴翠の蒐集は、二十代半ばの人形にはじまり、さらに祥瑞、国焼、かるた、羽子

板などにおよんだ。昭和八年、五十歳を前に引退したのちは、芦屋の山手にある安井武雄が手がけた自邸において、それら蒐集品の研究に没頭した。

同じ芦屋に住んだ山口吉郎兵衛の実弟・山口謙四郎（一八八六一一九五七）も学究肌で、中国の石仏を蒐集した。彼は、山口系の銀行の経営をまかされたほか、関連会社の役員を務めた関西実業家の重鎮でもあった。大正から昭和初期にかけて当時学術的にも解明されていなかった東洋の古美術に興味を示し、独自の鑑識眼と洞察力で中国の石仏、金属工芸品などを蒐集した。山口は、研究者とも親しく交流し議論を交わし、ときには研究者でさえ山口の見識に見習うものがあったという。それらは、単なる骨董趣味とは一線を画する学術的視野に立ったコレクションであった。

大阪の証券会社の二代目・黒川幸七（二八七一一九三八）は、明治末から大正初頭にかけて、中国の古美術をはじめ古墳出土の古鏡、刀剣や鐔などを蒐集した。仕事を番頭にまかせて、自らは研究をつづけ、蒐集品の死蔵を好まず「国家の学問の発展のため」に寄与した。

同じく学術的研究の立場から蒐集をつづけた人に辰馬悦蔵（二八九二一一九八〇）がいる。白鷹醸造元の三代目として家業を継ぐ一方、若くして考古学を志し、京都帝国大学において研鑽を重ねるとともに、銅鐸と玉類などを蒐集した。他のコレクションが美術的価値に重きを置くのとは異なり、学術的価値に重点をおいた蒐集といえよう。

阿部房次郎（一八六八一一九三七）は、紡績業を通じて中国との貿易から、大正時代、当時散逸の危機にあった中国書画の名品の蒐集に努めた。阿部は、

中国の歴史を敬愛し、仕事の合間を縫って東洋の古美術を蒐集することを業しんだ。昭和四年には、その全容を紹介する豪華図録『來嶺館欣賞』を刊行している。

これらコレクションの多くは、日本、中国の古美術が中心であるが、一方、大正から昭和にかけての視察旅行などでヨーロッパを訪れた人びとのなかには、西洋美術の蒐集に没頭した人たちがいた。なかでも神戸の松方コレクションが名高いが、そのコレクションの売り立てを機に西洋絵画を蒐集したのが和田久左衛門（一八九〇一九六八）であった。長谷部鋭吉の設計になる住吉の自邸の三階には陳列室が設けられ、セザンヌ、ゴーガン、マチスなどの絵画がつねに見られる状態にあったという。また、俳句にも造詣が深く『水鳥』と称した冊子を定期的に発行するという一面ももっていた。

阪神間のコレクターのなかには、美術の領域をこえた蒐集家もいた。住吉の海運業主・岸本五兵衛は、世界各国の郷土玩具を自邸に集め、子寿里庫と命名して同好の士に開放していたという。大正末からはじめられたというコレクションは、バリ島、ジャワ島、ニューギニアなど当時の南方共栄圏の木彫の神像や玩具、人形、民芸品が主で、岸本自身もこれらの研究を手がけた。その成果は、岸本彩星童人の名で、昭和十二年から順次、『子寿里庫叢書』として編まれ、『異国玩具図絵』『ニウギニア其付近の島嶼の土俗品』『天王寺の蝸眼鏡』『貯金箱』が刊行されている。岸本のコレクションは、昭和十三年の阪神大水害の難は逃れたが、戦災により焼失した。

新富豪の主観的蒐集

船場のメリヤス業主の婿養子となった山本房次郎（二八八七一一九五二）は、大正半ばに芦屋に移り住んだ。白隠、仙厓、慈雲などの高僧の墨蹟の蒐集をはじめ、洋行後は西洋絵画にも興味を示したが、なかでも佐伯祐三の蒐集に賭けた思いには、なみなみならぬものがあった。それは、佐伯の没後数年を経た頃、芦屋に佐伯の激しい絵を好みそうなコレクターがいることを聞きつけた美術商が、佐伯の作品『煉瓦焼場』（カフェと広告）（サクレクル）を持ち込んだことにはじまる。佐伯の絵に惚れ込んだ山本は、短期間に百五十点あまりを蒐集、昭和十二年には、東京府美術館で回顧展を開催、同時に『佐伯祐三画集』（座右宝刊行会）を刊行するほどの力の人れようであった。山本はその序文で「佐伯の画が、どこが良いか、なぜ好きかというやうな事は、純粋な芸術論になつて来て、私如き者が仲々論じ尽くせるものではありませんが、もともと美術の鑑賞といふことの結局は好悪であつて、好悪には理屈は無いと私は思ひます。私が彼に特別な情熱を感じる訳は——多分性格の上から来るのでせうが、たゞ何となく彼の芸術が、悉く符節するやうに、私の好みに適つて居るからであります。若し佐伯の画が大して感心する程の画でないならば、私の好みが高いのでせう。少々僭上な申し様かも知れませんが、私は私の美術鑑識力の品位を、喜んで、又安んじて、彼の作品の上に賭けます」と語っている。それより以前、昭和十二年には、『中央公論』に『書道私論』を発表、書の芸術性について独自の見解を綴っている。



蒐集家たちはコレクションをいつも室内に飾り、生活を楽しんだ。昭和4年頃の山口謙四郎邸。



昭和15年、山本発次郎部を訪れた児島喜久雄教授が引率する東京帝国大学文学部美学美術史専攻の学生たち。毎年コレクションを見学するために阪神間のコレクターの自邸を訪れた。研究者とコレクターたちの密接な交流が読み取れる。

芸術家への支援

古美術など美術品そのものを蒐集する人びとのなかには、作品だけではなく芸術家そのものを支援する姿勢をとった人たちもいた。綿の貿易業を興した山本願弥太（二八八六一一九六三）は、武者小路実篤が主宰する「新しき村」への支援を惜しまなかった。

彼は、武者小路の要請で大正九年、ゴッホの《向日葵》を購入、日本に招来した。

山口吉郎兵衛、山口謙四郎の兄弟は、帝展に出品していた奈良の無名の画家・小見寺八山を支援していた。彼は、画家として認められるにはいたらなかったが、その交流は、志賀直哉によって『寂しき生涯』という小説となった。

また、芦屋に育った吉原治良、長谷川三郎という抽象画家に少なからず影響を与えた画家・上山二郎は、大正十三年、大阪三越で個展を開いたとき、株の仲買人・曾根良吉（一八七八―一九四七）の眼にとまり、支援を受けることになった。曾根は、わずかな年の間であったが、パリへの渡航費用や作品購入によって無名の画家を支えた。

このほか、大阪に丹平ハウスを開き、赤松麟作を支援した製薬業主の森平兵衛や、小出楯重の芦屋のアトリエを提供した呉服商の白井幸治郎など、阪神間の富豪たちの多くは、仕事と趣味を切り離さず、個人の好みの蒐集におさまらず、同時代の芸術家を支援していくことを惜しまなかった。

これらのコレクションは、現在、香雪美術館（村山龍平）、滴翠美術館（山口吉郎兵衛）、逸翁美術館（小林一三）という私立美術館として公開されている。また、山口謙四郎、阿部房次郎のコレクションは大阪市立美術館で常設展示され、山本発次郎コレクションは大阪市立近代美術館建設準備室に収められているなど、それらの蒐集品は、今日、美術的価値が認められている。その価値を見いだし蒐集したのは、彼らコレクターたちの広く独創的な見識にもとづく眼であったことを忘れてはならない。